
人間だった天使様

エンジン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間だった天使様

【Nコード】

N0133X

【作者名】

エンジン

【あらすじ】

人間だった天使様は、自身の迂闊な行動により天界と魔界をオタク文化を蔓延させ、和解させてしまう。

遂には神々が二次創作に興味を示し、その犠牲に選ばれた天使様はワケの分からない復讐を誓いながら、物語からの脱出を試みる。

これはそんな残念な天使様が色々と歩き回り、世界を助けてしまう物語。

嵌められた天使様、墜落する天使様

「のう、お前世界を旅したくはないか？」

ある晴れた日のことである。

主神である、レヴェ様がそう口に出したときから私の不幸は始まったのかも知れない。

そうそう、私はカイゼル。

元人間の天使である。昔の人間だった頃の名前はもう忘れた。

偶々、神力といった力の数々が高水準で揃っていた私は他の同じ様な境遇者と共にとある試練を受けた。

世に言う『転生』である。

最初は全員で喜んだ物だ。

チートにハーレム、好き放題にやった。

だが。

その『転生』の回数に際限がなかった。

終わらない転生、終わらない人生。

数々の者は絶望に打ちひしがれ、とある者は後悔し、遂には凶行に走った。

そして正常に残ったままの私を含めた数人はその者達を止める為にその力を奮った。

たくさんの犠牲を生み出し、これが神の試練だと知った時には凶行に走った者達が潰え、数少ない戦友達を失った後だった。

私は復讐を決意した。

この怒りをいずれ貴様に…。

私は先輩達と競い合い、神々と会合し、時に下界の人々を助けて信仰を得ながらレヴェ様を倒す機会を探し続けた。

だが今となってはそれもどうでも良くなった。

何故なら…。

「カイゼル！、魔界ギルドと同盟してあのぶぎゃー王国を今度こそランキング一位の座から引きずり落とすのよ！！」

ネットゲームにハマって引きこもりになったアフロディーテ様が、

「ヤバイ、ヒナタちゃんハアハア（＊、＼、＼）」

「カイゼル！、何が戦場の。アルキュリアだ！
私にそっくりの人物が居る性でみんなからセルベリアたん、セルベ
リアたん……どうしてくれる！！」

上からオーディン様が、下にはその娘である戦乙女セルベリア様が
……。
アテナ様に至っては下界に降り、キャバ嬢のナンバーワンとして働
いている。

先日、下界のテレビ番組の特集でそのお姿を映していた。

今天界及び魔界は仕事をしてはいるものの、状況は混沌としている。

原因は勿論私だ。

私が下界に降り立った際にどうなっているのか分からないジャンプ
の現状を知るため買って帰った時である。

「カイゼルよ、その書物はなにか？」

新興神であるレヴェエ様他、アフロディーテ様やオーディン様と言っ
た古参の神々が偶々、俺の天使ポケット（簡単な例えで四次元ポケ
ット）からはみ出したジャンプに興味を示した時にそれは起こった。
今までジャンプといった娯楽性のない世界に居た人間が居たらどう
なるだろうか？

答えは簡単だ。

「カイゼルよ、至急にこの書物の続きを我が元に届けるのだ！」

「レヴェ様、それは週刊誌と言って週に一度、新刊が発刊される書物でして…」

「ほう、なる程な…。」

「ならば次はこれを入手せよ、カイゼル」

「そ、それをですか？」

「そうだ、行け、カイゼルよ」

レヴェ様が指差した先に写るのは、ラブプラスとアイドルマスターといった所謂ギャルゲー。

その指示通り私は下界に降り、某ゲーム販売店GE。に行き、女性店員が会計をしているにも関わらずに自費でゲーム機とゲームソフトを買い、帰還した。

帰る際に女性店員の冷めた視線とその前で買ったという羞恥心が徐々に私の心をえぐり取った。

とにかく、それを手にしてからはレヴェ様は暫く御自身で創りだし

た世界に閉じこもり、出て来なくなつた。

（その間の事は私が何とか纏めた）

それからである、他の神々が興味を持ち、その都度私が行かせられ、天界は徐々にその姿を変えていった。

無論、その巻き添えに合つたのが魔界（地獄界）である。

これも私がやった。

やり方は同じパターンだったが、こちらの方が悲惨だった。ネットゲームのやりすぎにより数々の悪魔達が餓死したし、特に淫魔はギャルゲーにより、腐女子が増え続けた。

自分の魅力で落とせない、キャラクター達に魅力を感じる。よく分からないが大半がそんな台詞を吐いて死んでいった。

とにかくこの大惨事を越え、ようやく落ち着きを取り戻し、魔界とも和解したが、私はその功労者として2界の繋ぎとなり二次元を提供するようになった。

そして…、神々はまた新しい物に興味を示した。

そう、その名は

『二次創作』

という。

そして私は神々嵌められ、冗談半分で作った肉体に様々な能力や道具を付けて私の魂を封じ込めた。

「簡単に言えば転生である」

そんな私、いや俺は何だかよく分からない世界に落ち、更にその世界に張られていた壁を越え、とある社に墜落した。

「何だ、敵か!？」

「お下がり下さい、ミラ様!」

こうして私、じゃなくて俺はここ、ミラの社に墜落したのである。
世界の壁を越えて。

これは今まで天使という立場から私という一人称を使っていた私が神々への恨みから俺に言い替えようとするよく分からない世界を何故か救ってしまうお話。

うん、自分で言ってもよくわからない。

天使様、御子見習いになる

社に空いた穴が太陽光でサンサンと部屋を照らし、僅かに風通しが良くなったこのミラの社、そこで正座した男と警戒して剣を抜く男性、そして上の穴を見ながら感心しつつ、正座した男に視線を移した。

「どうしてお前は上から落ちてきたんだ？」

私の勘違いだったらしいのだが一瞬断界殻を破られたのを感知した。それはお前か？」

「しえる？、…貝の仲間か何かですか？」

落とし穴に落ちていつの間にかここに突っ込んでたんですが…」

「いや、空に落とし穴なんてあるわけないだろ」

「怪しいヤツめ！」

このイバル様が貴様を直々に成敗してくれる！！」

「えっ、ちよっ、刃物を抜くのは…」

「問答無用！」

「え」

私がこの社に落ちてから数分、そんな多少の誤解による交戦はあったものの、家主と思われる女性と褐色の肌と白い髪、やけに威張った物言いが特徴の青年を何とか説得し、この世界の情報を引き出す事に成功した。

どういった賠償を払えばいいかや曰わく私は何者か等お互いに情報を交換し、納得した上で改めて交渉を始める。

これが私の初めての接触だ。

リーゼ・マクシア、これがこの世界の名称らしい。

何でも精霊と人が共存する世界であるそうだ。

よくあるファンタジーといった世界観なので経験も山ほどあるし、これからの生活に心配する事はなさそうだが、問題はここで一体何をすればいいのか？

よくある『世界を救え！』とかなら考えられなくもないか？
それよりも大丈夫だとは思うが天使ポケットが使えるのか調べないと…。

ついでにこの身体についても…。

調べる事が多いな。早めに終わればいいんだが…。

とりあえずしばらくの方針は自己鍛錬や情報収集にでも当てよう。
それよりもまずは…

「という事で肉体労働が何かで返せる仕事ってありませんか？」

この言葉に2人はいぶかしみながらもとある仕事を斡旋してくれた。そう、その仕事とは先程の社の家主ミラ様をお支えする重要なお仕事、御子、

……の見習いである。

こうして私は二・アケリアの御子見習いとして働く事になった。

とりあえず仕事は明日かららしいので今日はこのイバル先輩（名は体を表すというがこれはまさしくそうである。

そもそも彼の両親はどうしてこんな名前にしたのだろうか？

これではイジメの…（以下略）に二・アケリアに案内していただく。そこでどこか空き家があればそこに住まわせて貰えるそうだ。

てつきり監視の為に遣わしたのではと思っていたので正直意外だったが理由を聞くと、

『お前のようなワケの分からないヤツをミラ様をお迎えする御子である俺様の家に上げる筈がないだろう。』

そもそも貴様がミラ様のような偉大な御方にお会いすることこそ間違い…（ここから三十分くらい話が続く）』

とりあえず御子の仕事は大変苦労しそうだという事はわかった。

ついでに私を毛嫌いしてるらしい事も。

その後、結局イバル先輩はミラ様の社を直しに行くとかで村の人に案内を任せて適当な道具を抱えながら来た道を引き返して行った。村の人達も最初はぎこちなかったが少しずつ事情（といっても適当な記憶喪失というでっち上げだが）を話すととても親切にしてくれた。

天界での日々を思い出し、こことの扱いの差に涙が出た。

もう天界に戻らなくてもいい。

様々な案内を受け、イバル先輩が帰って来るまで子ども達と遊んで終わった。

自分も社に手伝いに行けば良かったのだろうがイバル先輩は俺様一人で大丈夫だと邪険に扱われてしまったので仕方なかった。

…明日はとにかく頑張ろう。

外伝 最強のポケモンのマスターになった天使様（前書き）

試しに書いてみましたがつろ覚えな為にめちゃくちゃに...。
なんでこんなもの書いてしまったんだろう・・・。

外伝 最強のポケモンのマスターになった天使様

ポケモンリーグ、それはポケモンマスターを決める決闘場であり選定場でもある。

そこに通じる道は一つしかなく、その名をチャンピオンロード、いわばふるい落としの洞窟と言われ、一説にはファイヤーと言われる伝説の三鳥の一角が住むと伝えられている。

- - - 話が逸れたがそのポケモンリーグに1人の青年が立っていた。それだけなら彼は特に目立つ存在でもない。自分を主人公と思う数々のポケモントレーナーが栄達を夢見て見上げるのはそれは数え切れない程見て来れる。

… - - - だが青年は違う。

その青年は何せ、ボールベルトにモンスターボールが一つ、つまりポケモンを一匹しか持っていなかったのだ。

青年は様々な視線に晒されている事に気付くもそれらを無視して受付まで歩いていく。

途中、故郷でポケモンマスターを夢見ていたとある博士の息子を見つけた。

月日は経つのが早いとは思いながらも、正直こんな年の子に旅をさせるのは如何なものかとも思わないでもない。

性犯罪や殺人等が全くないので安心して親がポケモントレーナーになる為に送り出したのだろう。

子ども達は堂々とトレーナー制度で給金を受けて旅に出るが自身も

幼い日にいきなり荷物を背負わされて旅に出された時は正気を疑ったものだ。

更によく見ればちらほらと知り合いの顔が居る。

三人組の男女の中にジムリーダーであった青年と故郷にすんでいた少年、どこかのジムに居た姉妹の末っ子。

どうやら自分は随分と道草を食っていたらしい。

とにかく受付場にてエントリーすると担当していた少女はかなりの大声を上げて驚愕していた。

当然だろう、ここに来るまでポケモンは一匹、しかも『この子』は本来なら戦えるとは思えない最弱の部類に入るポケモンだ。

正直、何かズルでもしたのではと疑われても仕方がない。

それに青年は多数のバッチケースを見せる事で対応する。

そう『多数のバッチケース』で。

その少女は何故こんなに他の地方のバッチまで揃えているのか分らなかったが、確認の為に「しょ、少々お待ち下さい」と焦りを含ませた声で言うとすぐさま数人の係員や鑑定士がバッチを確認しようとするがそこに1人の女性の静止の一声が入る。

「お待ちなさい、そのバッチは確かに私たちが差し上げたバッチに間違いありません」

少女達が見たのは確かにそのバッチを所持し、そしてバッチに相應しいかを確かめる守護たる役目を持つ女性とそれに頷く多数のジムリーダー達だった。

「今回は貴賓席での観戦という事で参りましたが貴方が出るという情報は本当だったみたいですね…。」

「どうです？、私達ともう一度ポケモンバトルでも…」

珍しい女性の好戦的な態度に周囲は啞然としながらもその結果に興味の視線を向ける。

だが、青年は興味がないように言うと言つとさっさと受付を済ませてホテル帰ろうとしてしまう。

「今回、私達が用意したポケモンはジムで使う選定用のポケモンではありません！

どうか一度でいいからお願い出来ないでしょうか！？」

余りの出来事にトレーナー達はショック等を隠せずあたふたとしてしまうがその場に居合わせた他のジムリーダー達により、更に場は混乱してしまう。

「儂のギャロップの方が因縁がある。

先にバトルさせてもらうぞ！」

「何を言っているのかしら？

私のエスパーポケモンが先よー！！」

「待ってくれ、オレのイワークの方が先だー！！」

「た、タケシ！？」

「あれ、あの人…」

「ピカ〜？」

「待ちなさい、私達はわざわざ船でここまで来たのよ!？
最初は私達でしょう!！」

「なんですって!？」

「拙者のポケモンで貴様を倒す!！」

「抜け駆けするな。」

行け、僕のストライク!」

ジムリーダー達が互いにポケモンをだし、牽制しあう中で青年は悠々と泊まっているホテルに帰宅する。

そして、後にポケモンリーグ最悪の悲劇とも言われる事件が今、幕を開けようとしていた。

予選当日、青年は初戦一番目という良くも悪くも注目される一戦を迎えることになった。

青年の相手になるトレーナーは予選突破は確実とされているルーキィ!。

だが不思議と青年はボールを見つめているだけだった。

闘技場となんら変わらないこの場所でモニターに相手と自分のポケモンが映し出される。

相手はリザードン、ギャラドスにピジョット。

だが、青年のポケモンは影絵だった。

しかし、形は容易に想像できる。

しかしこのポケモンは明らかにこんな場所に持つてくるようなポケモンではない。

ましてや相手はその進化したもの。

赤い帽子を被る少年は余計に混乱した。

「なあ、タケシ、エリカさん。

あれって間違いなくあのポケモンですよね」

一応、今回は目上が居るので敬語で話したが少年、サトシには訳が分からなかった。

ギャラドスに進化することやそうなった瞬間には驚いたがそのまへのあれは明らかにそこらへんで釣り上げた魚と何ら変わりがなかった。

ましてや見た限りそれが一匹だけ。

負けたら終わりである。

だからこせ自分が対峙し、苦勞して勝った彼等がここまで執着するのか果てしない疑問があった。

しかも、連れの少女カスミも黙ったままなので余計にこんがらがってしまふ。

ここで開始のアナウンスになる。

司会もかなり混乱しているらしく頭を抱えながら何とか話していた。

「それではポケモンバトル、スタートオオ！」

…半ば投げやりになったような気がしなくてもないが両者がポケモンを繰り出す。

相手はリザードン、そして青年は・・・

「ニヤハハハハ、こ、コイキングなのニヤ」

「オレちよつとトラウマだけどこんな場所に出されると…ププッ」

「ギャツ、ギャツプがスゴすぎよ」

「…」

単なる客席の一組に彼等は変装して座り込んでいた。

ロケット団、そのボスであるサカキは数人の優秀な部下を伴いこの一戦を観戦しに来ていた。

だが前の自分達と同じ様に部下達は会場にいる客と一緒に笑い転げている。

この一戦を真面目に見ているのは自分と同じ様に惨敗したかその力の一端を知った者達だろう。

「お前たち、黙って見ている。

俺の言いたいことが直ぐに分かる…」

サカキは部下達を一睨みするとすぐさま会場に視線を移した。始まるのだ、あの惨劇が今ここで。

サカキは思わず眉をしかめた。

「おいつ、どういっつもりだ！」

青年は自身のポケモンが嘲笑を受けた事に若干腹をたてつつも相手のトレーナーを見た。

「コイキングだと!？」

確かに金色と色は違うがそれだけじゃないか!!
お前ふざけてるのか!？」

青年はその怒声にただ視線だけを返し、無言を貫いた。

トレーナーはそれに気付き、その怒りの矛先を全く動かずに視線だけをこちらに向ける不気味なコイキングに向けた。

「リザードン、かえんほうしゃ！」

リザードンは自身の主に従い、その轟炎を吐き出した。

この場にコイキングの丸焼き一匹が出来て終わり。

それがリザードン、トレーナー両者と会場に居る殆どの者達の考えだった。

「コイキング、…跳ねるだ」

「いけません、ポケモンを戻しなさい!!」

唐突に立ち上がったエリカに三人は面食らい、思わずマジマジと見

てしまった。

そういえばなんで貴賓席にいないのだろうとも思ったがそれは後回しにしてとりあえずサトシはエリカに問いかける。

「どうしたんですか、エリカさん？」

「どうしたではありません。

あのままではあのリザードンが……」

ゴキッ……

「……っ、遅かった見たいですね」

その言葉に慌ててサトシは会場に視線を戻した。

「うわぁぁぁ、リザードン……!」

口から炎ではなく赤い液体を垂らしながら首をおかしな方向に曲げてリザードンは倒れ込んでいた。

すぐさまジョーイが駆けつけ、モンスターボールにしまおうと言いつけるとトレーナーはようやく正気を取り戻して、さっさとリザードンをしまった。

ジョーイは何も言わずにモンスターボールを取り上げるとセンターの方へ引き返していった。

「お前！、よくもリザードンを！！」

行け、ピジヨットと叫んで現れたその鳥ポケモンはいきなり空をとぶを使い、攻撃の範囲外から襲いかかる。

「何をしたかわからなかったがこれなら貴様のコイキングも手も足も出まい！！」

そして死角から襲いかかるかかるピジヨット、だがこの程度ではこの2人を止める事は出来るはずもなかった。

「コイキング、殺すなよ。
優しく跳ねるんだ」

そういったのも束の間、襲いかかって来たピジヨットの顎にカウンターの要領で尻尾を叩きつけた。

ピジヨットは相手にぶつける筈だったその運動エネルギーを揺らされた脳では制御出来ず、地面にぶつかり、翼を折り、何度も転がりながらトレーナーの前へとその姿を現した。

「くっ、ピジヨット！
許さんぞ、お前だけは……！！
行け、ギャラドス！！」

コイキングの進化系であるギャラドス。
ギャラドスは仲間の敵を討とうといきなりその牙をコイキングへ向けた。

だが青年とコイキングに焦りはない。

「コイキング、跳ねるんだ」

その言葉に従いコイキングは跳ねた。
壁を蹴り、床を蹴り、空を蹴る。

その究極にまで洗練された跳ねるは一つの武術へと発展する。

『縮地』とある武術の走法だ。

これにより、ギャラドスとトレーナーはコイキングの鱗の輝きが描く、軌跡しか追うことができない。

「体当たりだ」

その一声にギャラドスは反応し、思いっきり後ろへ飛んだ。

ほぼ勘に頼った回避だったがそれは功をなし、コイキングの攻撃の余波によってクレーターを作りながら空中に投げ出されたコイキングはギャラドスにとって唯一無二のチャンスだった。

「ギャラドス、今だ！
はかいこうせん！！」

ギャラドス達龍種をこの世界の強者へと留める一つの技はかいこうせん。

反動で動けなくなるとはいえ、その威力は余りある必殺の一撃。
トレーナーは勝利を確信した。
ところが…、

「俺のコイキングが撃てないとも思ったのか？
コイキング、破壊光線だ！」

ギャラドスのはかいこうせんが迫る中、コイキングはその言葉を聞き、ゆっくりと口を開ける。

夥しい量の光の粒子がコイキングに吸い込まれ、勢いを増して行く。

「終わりだ」

その一声とともにギャラドスの倍を超える光の閃光は軽々とその巨体を吹き飛ばしたのだった。

…続かない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0133x/>

人間だった天使様

2011年10月26日23時16分発行